

開物叢說

石印上

蘭友便細本

和書門	
一七五八	九
二三八	九
一三架	函
二冊	類

庫文閣内	
一七五八	九
二三八	九
一三架	函
二冊	類

内閣文庫	
番號	和 17589
冊數	2 (1)
函號	183 604

物産 四三

183-604



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部少教授宇都宮義綱編輯

開物叢說

開拓使藏版

開物叢說緒言

古ヨリ事ヲ議スル者皆富國強兵ヲ言フ富強

ニ字竟ニ措大ノ常談トナリテ幾ト人ヲシテ聽

クフ厭ハシムルニ至ル然レモ天下ノ事唯言フ

テ行フ可ラサルモノ有リ富強ノ策多シト雖モ

其行ハレ難キハ亦故有ルカナ竊ニ以ルニ我

神州ノ富饒ナル草木金石鳥獸魚介是ヲ用ヒテ

餘リアルノ物産ヲ輕蔑シ徒ラニ外國ノ奇品ヲ

玩ヒ國力ノ疲弊ト民財ノ耗散ヲ思ハサルハ如

開物叢說 緒言

開拓使

何ソヤ彼ノ白金鑽石ノ如キハ萬國共ニ稀ナル
所ナレバ競テ是ヲ珍トスルモ亦理無キニ非ス
然レモ博ク尋テ深ク索メハ是ヲ獲ルノ日無シ
ト言フ可ラズ其他人工ヲ以テ造リ出スヘキノ
品物トシテ成ラサルノ理無シ只産物ヲ活用ス
ルト死用スルノ二ニ在ルノミ我 國天成ノ産
物多シト雖モ製煉分析ノ術未タ明カナラザル
カ故ニ空ク之ヲ死用スルト少カラス此弊ヲ救
フテ 國家ヲ富强ニセント欲セバ化學ニ從事
シ造化ノ秘蘊ヲ探リ百工ノ利益ヲ興スヨリ他

無シ故ニ經濟ノ志ヲ懷ク者ハ化學ヲ講セズン
ハアル可ラズ其書既ニ舶齋スルモノ尠カラス
今其善キ者ヲ擇ヒテ悉ク之ヲ繙譯シ以テ公ニ
セン事固ヨリ企望スル所ナリ然レモ是業ノ如
キハ吾輩社友志力ヲ戮ハスルモ能ク速ニ成ル
可キニ非ス故ニ先ツ假リニ一書ノ體裁ヲ定メ
題シテ開物叢說ト曰フ乃チ日用切近ノ製造品
四十種ヲ擇ビ是ヲ初集ト名ク而シテ西籍ヲ繙
ク毎ニ其說ニ遭ヘハ輒チ譯シテ之ヲ輯ム但シ
篇中ノ序次少ク西人ノ區別ト異ナリ只今日ニ

切ナルヲ主トシ且先ツ得ル者ヲ前ニス假リニ
 家什飲饌衣服藥劑ノ四類トナス斯ク倫次ヲ設
 クル事洋書ノ原模ニ拘ラスト雖モ本文譯說ニ
 至ツテハ一ニ西文ノ本意ヲ存シ敢テ妄ニ増減
 スル事ナシ且吾輩井蛙ノ見極メテ廣深ノ域ヲ
 窺フ事能ハザレハ固ヨリ是ヲ以テ全書ト謂フ
 ニ非ス只楷梯ヲ近キニ求メテ以テ漸ク遠キニ
 及バント欲スルノミ上ニ言ヘル四十種ハ動植
 二體ニ出ツル者多ク無機體ト雖モ唯土石鹽鹵
 ニ止ル既ニ輯メテ此ニ至レバ鑛屬ノ部モ亦採

取セズンハ有ル可ラス依テ朴鑽ノ類十種ヲ附
 ス只邦産有ルモノ設令邦産ノ稀ナルモ得易キ
 者ノミヲ舉ク通篇五部各十種要スルニ開物學
 ノ一斑ヲ見ルニ足ルノミ看官此書蒐輯ノ狹キ
 ヲ賤ミ誤テ學境ノ廣大ナルヲ蔑視スルヲ勿レ

明治五年壬申春

宇都宮義綱識

Faint vertical text in the right-hand column, likely bleed-through from the reverse side of the page.

開物叢說初集

總目錄

第一類 家什十種

第一 石鹼

第二 植油 動脂

第三 獸蠟

第四 樹脂 巴麻油 瀝青

第五 木炭 石炭 松烟

第六 紙

第七 假漆 封蠟

開物叢說 卷一 家什十種 石鹼

第八 墨汁

第九 陶器

第十 玻璃

第二類 飲饌十種

第一 食鹽

第二 砂糖

第三 葡萄酒

第四 麥酒 菓酒

第五 火酒 亞爾筒兒

第六 醋

第七 牧牛說 乳汁 酪 乾酪

第八 麪包 ビスコイト

第九 芋卵法

第十 茶 煙草

第三類 衣服十種

第一 獸皮消軟法

第二 木綿

第三 麻 亞麻

第四 絹

第五 牧羊說 毛布 羅紗

博物叢書 開拓便

第六 染色法

第七 染彩藥品之上〔植物〕

第八 染彩藥品之中〔動物〕

第九 染彩藥品之下〔金屬〕

第十 花布印法

第四類 藥劑十種

第一 消石

第二 消酸

第三 硫黃

第四 硫酸

第五 鹽酸 君王水

第六 格錄爾加爾基

第七 磷 硫梯

第八 剝篤亞斯 曹達

第九 諸摸尼亞 礪砂

第十 雷頰 格錄爾酸加里

第五類 朴鑛十種

第一 金

第二 銀

第三 鐵

開物叢書 卷之三

第四 銅

第五 瀕

第六 鉛

第七 錫

第八 亞鉛

第九 アンチモニー 蒼鉛

第十 マンガン ヨバルト

總目錄終

開物叢說

家什類第一

石鹼說卷上

目次

石鹼總論

石鹼起源

石鹼製法諸般ノ區別アルヲ論ズ

通常石鹼ノ原料トスル曹達油ノ製法

曹達油ト阿利襪油トヲ以テ石鹼ヲ製スル

法附綠黑色ノ石鹼ヲ修製メ白色トナス

石鹼上目

開物叢書 家什類第一 石鹼上目

法

間脈石鹼

獨逸國ノ加里石鹼製法

諸種ノ脂油ヲ以テ石鹼ヲ試製シテ其佳否

ノ考案ヲ録ス

第一阿利襪油 第二扁桃油

第三牛脂 第四猪脂

第五陳舊ノ酪 第六馬脂

第七蕪薑油 第八蕪菁油

第九罌粟油 第十大麻油

第十一胡桃油 第十二亞麻油

第十三罌粟油ト牛脂ノ合劑

第十四加里ト脂油ヲ用ルノ試験

第十五加里石鹼ヲ硬固ナラシメンガ爲

ニ加フベキ物品ノ論

第十六火ヲ用ヒズシテ石鹼ヲ製スルノ

試考

石鹼說卷下

目次

石鹼ヲ製スルノ要件ヲ再論ス

冷製石鹼

軟石鹼、黑石鹼、樹脂石鹼、毳毛石鹼、坐蓐草毡ニ揉ルベキ蠟製石鹼液、紅黃透明ノ香奩石鹼及羊脂石鹼、急製石鹼水、即チ少ノ費用ヲ以テ洗衣ノ用ニ供スル石鹼様ノ液ヲ製スル法、晚近ニ至テ發明セル石鹼成分ノ詳説、石鹼成分ノ異同ニ隨テ硬軟ノ別アルノ理ヲ明ス、石鹼他ノ酸化金屬ニ遇テ分解スルヲ論ス

石鹼ノ主能

加里ト曹達トノ區別及其製法、食鹽ヲ分解シテ曹達ヲ得ル法、芒消ヲ分解シテ曹達ヲ得ル法、諸種油類曹達鹵ノ好否ヲ鑒スル法

開物叢說家什第一

石鹼譯說上

石鹼總論

石鹼ハ固形物品ノ名稱ニシテ是レ苛性鹼(油鹼)ノ
 鹽原名「アルカリ」ト云加里曹達石灰等ノ總名ヲ
 油或ハ脂ニ合和シ且稠厚ト爲ス所ノ者ナリ布
 帛ノ洗滌ニ用ヒ又毛布ヲ修繕スル磨車ノ用ニ
 供スル者ハ動物植物ノ脂油ヲ以テ製ス脂油ハ
 原來水ニ溶化スルヲ能ハズ然ルニ之ニ鹼鹽ヲ

開物叢說 家什第一 石鹼上 月石吏

和スルニ因テ能ク水ト混和シ且多般ノ効用ヲ
 做ス即チ毛布ノ膩氣ヲ奪ヒ利諾布(亞麻ヲ以テ
 織タル布ニシテ西洋ノ常布ナリ)ヲ潔白ニシ諸ノ
 汚點ヲ除祛スル等ノ如シ
 扁桃、胡桃、大麻、薔、罌粟等ノ榨油、皆以テ石鹼ヲ
 製スルヲ得ベシ又鯨油及諸ノ獸脂共ニ可ナ
 リ草木種子ノ油ヲ以テ製スルノ石鹼、種子良性
 ニシ且之ヲ榨ルニ火力ヲ假ラザル者ハ頗ル良
 好ノ品ヲ得然レモ多般ノ石鹼、流動シテ糊様ナ
 ル者過半トス

鯨油ヲ以テ製セル石鹼ハ利諾布等ヲ漂白スル
 カ爲ニ甚佳シ然レモ稍臭氣ヲ帶フ但此臭氣ハ太
 陽ニ晒スヲ數日ニシテ消散ス
 獸脂ヲ用ル者ハ惡臭無ク且硬固ナリ
 西班牙石鹼ハ木油、即チ阿利襪油(阿利襪油ハ阿
 利襪樹ノ實ヲ榨テ取ル者ニシテ藥舖ニ「ホルトガ
 ル」油ト稱スル者ナリ此樹、暖帶諸國ニ産ス寒國
 ニハ培植シ難シニテ製ス其白色ナル者ハ間脈
 アル者ニ比スレハ軟ナリ而シテ間脈アル者ハ性
 味亦苛烈ナリ精油(蒸餾シテ出ル油)ハ稠厚ナル

石鹼上
 二

脂油ノ如ク石鹼トナリ難シ都テ好石鹼ヲ造ル
 カ爲メニハ宜ク油ヲ澄澱セシメテ上清ヲ用フ
 ヘシ而シテ其渣脚ハ以テ下品ノ石鹼ヲ製ス
 餅狀ノ硬石鹼ヲ造ルカ爲メニ用ル鹼ハ炭酸
 曹達ニシテ之ニ石灰ヲ和スルニ因テ苛性ヲ發
 スル者ナリ方今多ク製スル所ノ柔軟糊狀ノ石
 鹼ハ白色或ハ灰色ノ剝篤亞斯ヲ以テ製ス
 軟石鹼モ亦硬石鹼ノ如ク鹼鹽ノ力ニ因テ能ク
 水ニ混和ス此品ト白石鹼トノ區別ハ第一其淡
 褐色或ハ暗綠色ナル第二其斷エテ堅硬ナラス唯

柔軟ニ粘稠ナル糊狀ヲナスニ因ル然レモ此
 品白石鹼ヨリハ強力ナルカ故ニ羅紗毛布ノ工
 匠之ヲ撰用ス
 此品類ハ獨逸地方等ニ於テ多ク製シテ以テ發
 販ス
 軟石鹼ヲ製ス可キノ油分テ熱油寒油ノ二種ト
 ス熱油ニ属スルハ大麻亞麻ニシテ寒油ハ藝薑
 蕪菁ノ類ヲ云フ甲ハ高價ニシテ乙ハ廉價ナリ
 軟石鹼ニ用ル鹼ハ剝篤亞斯ニシテ生石灰ヲ
 合和ス石灰ハ石ヲ燒タル者貝灰ニ勝レリ

石鹼上 三

多量ノ苛性曹達ヲ水ニ溶化シテ其量殆ト水量
 ニ踰ル者一分ヲ新ニ榨リタル扁桃油二分ニ合
 シ火温ヲ假ラス大理石ノ脊内ニテ之ヲ研和ス
 レハ則チ善美ナル藥用石鹼ヲ得此品常石鹼ノ
 如キ不佳ノ臭味ヲ帶フコトナシ通常多ク藥用ニ
 供スル勿擲茶石鹼及亞里甘斯石鹼ト呼フ者ハ
 苛性曹達ト阿利襪油ヲ以テ糞製セル者ニソ亦
 佳品ニ属スレモ未タ全ク美ナフス此品ハ白色
 ナリ又紅脈及青脈ヲ具ヘテ大理石ノ如キ觀ヲ
 ナス者アリ是レ石鹼型ノ内ニ硫酸鉄ノ溶液ヲ

注加スルニ因テ此色ヲ發ス此他多ク造ル所ノ
 常品綠石鹼ハ大麻蕪菁亞麻等ノ諸油ニ苛性曹
 達鹵ヲ加ヘ或ハ屢鯨油ヲモ添加シテ製スル者
 ナリ此物不佳ノ臭ヲ存シテ浣濯スル所ノ布帛
 モ亦屢之ヲ傳染ス
 石鹼起源
 石鹼ノ發明其來ルコト既ニ舊シ蓋シ衣服ヲ初テ
 裁制セシヨリ甚後レザル可シ然レモ真好石鹼
 ノ製法完備ニ至リシコトハ人巧漸ク精ヲ極ムル
 ノ後ニ在ルカ如シ故ニ其創製ノ時世ハ則チ確

石鹼上 四

定スベカラサルノミ酒布ノ名稱或ハ獨逸ノ古
 言酒百ノ轉語ナリト云然レ此名既ニ赫蒲樓
 人(赫蒲樓ハ上古ノ國名其語言岐分シテ今ノ西
 洋諸國語ノ宗源トナレリ)謝列漢氏ノ書中ニ創
 見セリ布栗紐氏(往昔化學家)モ亦此ヲ徵セリ而
 ノ呀味越爾氏ヲ推テ其鼻祖ト云ヘリ呀氏ハ石
 鹼ヲ製スルニ木灰ト牛脂トヲ用ヒタリ古ノ羅
 馬人蓋シ其製法ヲ秘ノ普ク傳播セズ其證覈實
 ナリ邦貝以府ハ紀元後第七十九年(景行天皇ノ
 三十年)威蘇威山ノ地震ニ遇テ噴出スル刺華土

ノ底ニ埋沒セリ(威蘇威山ハ伊太里國內ノ火山
 ニシテ其噴出ノ爲ニ近隣諸邦屢害ヲ被ルコトア
 リ)然ルニ後來其舊墟ヲ掘テ石鹼匠ノ器什及一
 鍋ノ石鹼ヲ得タリ此品實ニ油ト鹵鹽トヲ以テ
 製スル者ニ係ル然レバ今ヲ距ルコト一千七百餘
 年ノ前既ニ石鹼ノ製法完備セシヲ徵スルニ足
 レリ

石鹼製法諸般ノ區別アルヲ論ス
 諸油ノ成分ハ三種ノ物質ニ係ル一ヲ脂素(蘇的
 亞林)ト曰ヒ二ヲ珠素(麻兒呀林)ト曰ヒ三ヲ油素

石鹼上 五

〔阿利印〕ト曰フ其遠成分ヲ剖折スレハ悉ク炭素、
 酸素、水素ノ集テ成ル所ナリ但其合和比例彼此
 均シカラザルガ故ニ諸種ノ脂油其性ヲ異ニス
 此諸素涵鹽或ハ酸化金屬ニ合スレハ輒チ各種
 ノ石鹼ヲ生ス
 石鹼ヲ製スルノ原料三種一曰有力鹽基即チ加
 里、曹達、加爾基、酸化鉛、酸化亞鉛是ナリ(按ニ此ニ
 二種ノ酸化金屬ヲ列スル者ハ所謂鉛膏等ノ如
 キヲモ亦一種水不可溶ノ石鹼ニ屬スルナリ)二
 曰水、三曰天然ノ脂油成分即チ脂、珠、油ノ三素是

レナリ
 石鹼ノ類大別シテ二綱トス一ヲ水ニ可溶品ト
 曰ヒ二ヲ不可溶品ト曰フ甲ハ加里、曹達ヲ以テ
 製スル者(即チ日常通用ノ石鹼)乙ハ諸酸化金屬
 ヲ以テ製スル者ナリ其酸化鉛ヲ以テ製スル者、
 別ニ硬膏(鉛丹膏等ヲ云フ)ノ稱アリ(此編不解石
 鹼ヲ略シテ只浣洗ニ用フルモノ、ミヲ説ク)日
 用ノ水ニ溶可キ品モ亦細別シテ二等トス、曰、硬、
 曰、軟、硬石鹼ハ曹達ト阿利、襪油、或ハ扁桃油、或ハ
 牛脂、及其他ノ獸脂ヲ以テ製シ軟石鹼ハ加里ト

開物叢說 卷之十 什餘一 六

開物書 家什第一 開招便

獸脂、或ハ草木種子ノ榨油ヲ和シテ造ル

石鹼ヲ製スルノ油、最好キ者ハ阿利襪、扁桃ノ二

品ニシテ獸脂之ニ亞グ例ヘハ牛脂、猪脂、酪、等ノ

如シ而ソ種子油ヲ下トス、藝薑、蕪菁、罌粟、大麻、等

是ナリ

佛蘭西、伊太利、西班牙、諸邦ニ於テハ阿利襪油ノ

廉價ナルニ因テ之ニ曹達ヲ和シテ硬石鹼ヲ製

スト雖モ英吉利、及歐羅巴、北部諸國ニテハ此油

ニ乏キガ故ニ多ク牛脂等ヲ用フ各種ノ製法下

ニ開示スルガ如シ

通常石鹼ノ原料トスル所ノ苛性曹達鹵ヲ製スル法

曹達鹵ヲ製セント欲セハ須ク先ツ之ヲ粉碎ス

ヘシ(炭酸曹達ハ炭酸加里ノ如ク急ニ濕ヲ引カ

ズ常ニ凝固シテ塊ヲナスカ故ナリ)其大塊ハ豫

メ先ツ重大ノ槌ヲ以テ之ヲ破碎シテ後之ヲ鉄

春ニ入レ搗テ粗末トス大製造局ニ於テハ扁平

ナル石盤上ニテ大鉄槌ヲ以テ粉碎ス但シ碎粉

ノ大サ砂粒ノ如クナルヲ度トシ可ナリ其極メ

テ微細ナルヲ要セス

石鹼上 七

開物叢書 家什錄 一

炭酸曹達ト生石灰トノ和量ハ用ル所ノ油ノ量
ニ原キテ定ム即チ硬固石鹼一千斤ヲ造ルニハ
阿利磯油六百斤 炭酸曹達五百斤
生石灰(一百斤)ヲ用フ尙多量ニ製セント欲
セハ此ノ定量ヲ率トシテ彼此相増加スベシ
曹達既ニ碎キタラバ別ニ生石灰ニ些少ノ水ヲ
注クベシ是ニ因テ忽チ熱ヲ發シ水化シテ粉末
トナル直ニ粗眼ノ篩ヲ以テ篩過ス一回此二
品ヲ混和シテ之ヲ桶ニ容ル桶底豫メ幾箇ノ瓦
片碎石ヲ安ヌ是レ滴汁ノ淋出ニ便センガ爲ナ

リ而シテ之ニ水ヲ注ク水ノ量ハ遍ク藥料ニ滲透
シ猶且其上ヲ踰ルヲ大約我半寸許ナルベシ既
ニ水ヲ注キテ二三時ヲ經ルノ後注管ノ塞ヲ開
テ滴汁ヲ漏ス此滴最稠厚苛烈ニシテ其重キ
卵ヲ浮バシムルニ足ル是ヲ頭滴ト名ク然レニ
其稀稠ノ度ハ須ク驗液器ヲ用テ精究スヘシ即
チ驗液器ノ十八度ヨリ二十度ニ至ル者ナリ是
ヲ器中ニ密閉シ貯フ(滴汁ヲ密閉スル所以ハ空
氣中ノ水分ニ合シテ薄弱トナラシメ且炭酸
漸ク之ニ和シテ苛性ヲ制スルヲ防グナリ)頭滴

石鹼 八

開物叢書 卷之十 第一

洩^モレ盡^ツルニ及テ注^ミ管ヲ塞^フキ復タ同量ノ水ヲ注^ス
加^シ放^シ置^スル^ヲ二三時ノ後再^ヒ之ヲ注^ス出^ス此
滴^モ其初^メテ滴^出スル間ハ其稠^厚ナル^ヲ殆^ト
頭^滴ニ讓^ラス之ヲ合^シテ貯^ルモ亦^可ナリ而^シ
漸^ク稀^薄ニ移^ル是^ヲ二滴^ト稱^ス次^ニ第三^回
水ヲ注^ツキテ更^ニ稀^キ滴^ヲ得^之ヲ驗^液器^ニテ試^ス
ル^ニ四^度ヨリ八^度ニ至^ル乃^チ別^ニ貯^フヘシ最^ニ
後^ニ桶^中ノ渣^滓中^ニ殘^留セル^ヲ滴^分ヲ收^メ盡^サ
ンガ爲^ニ復^タ水ヲ注^加ノ第四^滴ヲ取^ル然^レモ
此品甚^薄弱^ニシテ唯^後回^ノ頭^滴ヲ製^スル^新汲^水

水^ニ代^ヘテ益^{アル}ノミ此^ノ如^クニ^シテ滴^ヲ取^盡
シタル^餘滓^ハ桶^ヲ倒^ニシテ之^ヲ出^シ田^圃ヲ糞^ス
培^スル^ニ用^テ良^{ナリ}
或^ル驗^匠甚^多量^ノ石灰^ヲ用^フ譬^ヘハ曹^達ノ半^ニ
量^動ス^レハ是^ニ踰^ルニ至^ル又^之ニ反^シ甚^多石灰^ニ
ヲ吝^用ス^ルアリ蓋^シ石灰^極メテ純^好ニ^シテ新^鮮
ナ^レハ上^ニ記^スル^所ノ量^曹達^ノ五分^一ヲ採^テ
既^ニ足^レリトス若^シ其陳^久ナル^者ニ遇^ハ宜^ク
ク其量^ヲ増^スベシ而^シ石灰^ノ量^ハ稍^多キ^ニ過^ス
グト雖^モ妨^碍無^キガ如^シ然^リト雖^モ緊^要ナル

開物叢書 卷之十 第一 石鹼上 九

本草綱目卷之九十一 雜考 石鹼

定限ノ量ヲ越ユルハ實ニ益無シ且無益ノ價ヲ
費ス亦戒慎セヌンハアル可カラス

法

曹達鹵ト阿利襪油トヲ以テ石鹼ヲ製スル
法
鹵既ニ製シ了ラバ則チ阿利襪油ヲ鍋中ニ盛ル
ベシ石鹼一千斤ヲ製セント欲セハ油六百斤ヲ
用フ先ツ稀薄ナル第三鹵ノ一分ヲ油上ニ注加
シ火ヲ焚キ始ム之ヲ煮ルノ際木杓ヲ以テ斷エ
ス攪和シ其混合ヲ進促シ漸ク火度ヲ増シテ煮
沸シ鹵液ヲ少シ宛漸次ニ注加ス而シテ滾沸ノ度

ヲ保タシムベシ三鹵既ニ用ヒ盡セハ復タ第二
鹵ヲ初ノ如ク徐々ニ注加シ攪拌手ヲ住ムルコ
トメタルニスル
無カルベシ是ニ於テ油色漸ク乳汁狀ニ變シテ
竟ニ鹵ト相混和シ二三時ノ間ニ親和合成ノ象
ヲ現シ來ル而シテ後復タ頭鹵ノ醇厚ナル者少許
ヲ加ヘ愈之ヲ攪回シ尙煮沸ノ火度ヲ變換スル
コトナシ漸ク頭鹵ヲ加ルニ因テ石鹼ノ和成愈稠
密トナリ石鹼水分ト方メテ分解セントス此
候ヲ見バ輒チ二三斤ノ海鹽ヲ鍋中ニ投スベシ
是レ則チ愈水分ノ剖解ヲ催進シ暫時ノ間ニ石

石鹼上
十
石鹼

鹼分ヲ粒狀粘稠ノ液トナサンガ爲メナリ此期
 ニ至テ後尙同度ノ温ヲ保タシムルコト二時竟ニ
 鍋下ノ火ヲ撤シ復タ攪擾スルコト無ケレバ石鹼
 白ラ水分ヲ離レテ水面ニ浮フ暫時ヲ經ルノ後
 鍋底ニ設ケタル處ノ管孔ヲ開キテ其稀液ヲ洩
 シ去ル此液僅少ノ鹵鹽ヲ含ムノミ然レモ廢棄
 スルコト勿レ亦貯ヘテ新ニ曹達ト石灰トヲ淋滴
 スル初次ノ灌水トナスニ宜シ
 上法ニ隨テ石鹼鍋内ノ稀液ヲ除キ再ヒ底管ヲ
 閉テ復タ火ヲ焚ヤセハ尙其中ニ殘留セル少

許ノ水分或ハ稀薄ナル滴汁アルヲ以テ速ニ能
 ク流動スルコト初メノ如シ是ニ於テ之ヲ滾沸セ
 シメ前次未ダ用ヒ盡サハル所ノ最强キ頭滴ヲ
 徐々ニ注入シテ混合セシム此間意ヲ注テ石鹼
 ノ稀稠宜ヲ得ルヤ否ヲ察ス之ヲ鑿スルニハ屢
 石鹼ノ溶化煮沸セル者ヲ瓦石ノ上ニ滴下シテ
 之ヲ冷シ指間ニ捏テ其佳否ヲ察ス且此時ニ方
 テ深ク火度ノ強弱ニ注意スベシ
 但別ニ少許ノ強滴ヲ豫備セスンハアル可ラス
 是レ其化成ノ度宜ニ適ハサレバ更ニ之ヲ增加

セザル^ル能ハザルガ故ナリ鍋内ニ在ルノ石鹼
暗白色ノ粘稠液ヲナスト雖モ之ヲ冷セバ速ニ
固結シ指間ニ粘着セザルニ至レハ方ニ飽和熱
成ノ候トス是ニ於テ火ヲ撤シ放置スル^ト二三
時ノ後復タ鍋底ノ孔ヲ開キテ滲^シ滲^ルノ水液ヲ洩
出シ而シテ復タ火ヲ燃シ更ニ新水^{淨水}ヲ撰^ブ
ベシ水中ノ石灰甚タ石鹼ニ害アル^ト下ニ辨ス
ルカ如シ^シ少許ヲ石鹼ニ注加シテ之ヲ溶解セシ
ム是レ益之ヲ熟煮シ且型中ニ注瀉スルニ便ス
ルカ爲メナリ此ノ如クニ^ノ稍冷ル^ルノ後之ヲ型

移シ佳好ノ硬石鹼ヲ得

硬石鹼ヲ製スルノ通法ハ先ツ油或ハ獸脂ニ稀
キ曹達^{サウダ}滲^シ和シテ之ヲ煮^ク其鍋ハ底ニ一管ヲ具
スル者ナリ絶エス之ヲ攪拌スルニ因テ此劑漸
ク相合和ス是ニ於テ更ニ強滲^ヲ加ヘ且煮ル^ト
休マザレバ竟ニ合成ノ石鹼自ラ鍋面ニ浮フニ
至ル^ニ便チ火ヲ撤却シテ管塞ヲ拔キ鍋底ノ稀液
復タ親和ス可ラザル者ヲ洩シ去リ再ヒ新ニ醇
厚ノ滲^ヲ加ヘ復タ之ヲ煮ル^ト其飽和熱成ノ適
度ヲ得ルニ至ル即チ其合劑透明ニシテ之ヲ温

石鹼上
十二

開物叢書 卷之十 石鹼 一

湯ニ投スルニ悉ク溶化シ小球ヲ其湯面ニ發見スルコト無ケレハ方ニ是熟成ノ候トス宜ク之ヲ冷乾スヘシ此品暗綠色ヲ帶テ稍、黑色ニ近シ而シテ水ヲ含ムコト僅ニ百分ノ十六、其綠色ハ礬土ト酸化鉄ノ化合物及、硫化鉄ノ石鹼ニ混和スルニ因ル而シテ其原ハ蓋シ曹達ノ至精ナラサルニ係ル此品ヲ修製シテ白石鹼トナスカ爲ニハ之ヲ文火ニ上セ徐々ニ稀薄ナル鹼汁ヲ混和シテ蓋閉シ静置スヘシ是ニ因テ鐵分ヲ含ミタル礬性石鹼、合和ヲ保ツコト能ハスシテ自ラ分離シ鍋底ニ

沈降ス其雜物沈澱シ石鹼潔白トナルヲ候テ之ヲ型中ニ注寫シテ放冷シテ凝結セシメ而シテ後截リテ方形ノ餅子トス
間脈石鹼
綠色或ハ黑色ノ石鹼ヲ白色トセスシテ間脈トナサント欲セバ其煮沸ニ乗シテ適宜ノ水、或ハ稀薄ナル鹼汁ヲ注ケハ鉄分ヲ含ミタル石鹼白ヲ分離シ粗細脈ノ狀ヲナシテ白質ニ錯綜シ花石ノ觀ヲナス之ヲ型ニ注寫スルノ後宜ク速ニ冷定セシムベシ然ラサレバ脈ヲ現ス者恐クハ

開物叢書 卷之十 石鹼 一 十三

復タ沈塗^{シム}セシ終ニ截^キテ切片トス(按ニ是レ製スル所ノ石鹼^{シム}、自ラ鐵分ヲ含ム者ヲ云ヘリ若夫其白色ナル者ヲ化シテ間脈鹼トナサント欲スルキハ新ニ鐵分ヲ副加スルヲ要ス其法左ノ如シ) 間脈石鹼ハ白石鹼ト唯其色ヲ異ニスルノミ其色トハ紅色或ハ青色ヲ其白質ニ插間スル者ニシテ是レ赤酸化鐵或ハ黑酸化鐵ヲ加フルニ因テ成ル此品常品ニ比スレハ久ク乾固セシムルカ故ニ隨テ硬固ナルコ亦之ニ過キタリ 着色石鹼ヲ製スルノ法ハ煮熟ノ石鹼ニ適宜ノ

新滴ヲ注加シ直チニ硫酸鉄ノ溶水ヲ注入スレハ硫酸鉄曹達^{ソウダ}ノ爲ニ分解セラレテ黑酸化鉄ニ化シテ沈降セントスルノ間石鹼ノ一分是ト合シテ青色ヲ生ス是ニ於テ之ヲ稍冷シ稀液ヲ底管ヨリ洩シ去テ復タ之ヲ煮沸ス而シテ介者ヲシテ鍋ノ一隅ヨリ紅色或ハ赭色ノ酸化鉄(鉄丹)即チ所謂ベンガラ^{スミ}ノ細末ヲ仔細ニ水ニ研和シタル者ヲ注入セシメ篋ヲ以テ故意ニ之ヲ密合セサル様ニ班ナル混淆ヲナサシメンガ爲ニ或ハ唯上ニ向ヒ或ハ唯下ニ向テノミ攪拌ス(上下ニ

開物叢書 家世編 一 石鹼上 十四 開物叢書

攪回スレハ即密合ス是ニ於テ鐵ノ紅色石鹼ニ
錯綜スレハ直チニ火度ヲ増テ急ニ水分ヲ蒸散
シ遠ニ之ヲ型中ニ移ス處置緩慢ナレハ色分割
解スルヲ患ヘテナリ
阿利襪油三斤ハ白石鹼五斤トナル然ルニ同量
ノ油ヲ用テ間脈石鹼ヲ製スルニ僅ニ四斤四十
箋ヲ得ルノミ是故ニ間脈石鹼ハ自ラ他品ヨリ
堅硬ニシテ澆婦最モ之ヲ撰用ス是レ其他品ト同
量ナルモ必要ナル石鹼分ヲ含ムト多クシテ水
分ヲ含ムト少キカ故ナリ是ヲ以テ此品亦炎熱

ノ候ニ於テモ分解スルト常品ノ如ク甚シカラ
ズ故ニ之ヲ貯藏スルモ亦便ナリ
獨逸國ニテ加里石鹼ヲ製スル法
獨逸國ニ於テ美ナル硬石鹼及セ澆濯ニ用フル
軟石鹼ヲ製スルニ木灰ヲ以テス但生石灰ノ助
ケヲ假テ苛性ヲ發セシメ之ニ和スルニ牛脂或
ハ羊脂ヲ以テス木灰ヲ此用ニ供スルニハ先ツ
石ヲ積テ墾墾シタル處ヲ設ケ其裏ニ此灰ヲ堆
積シ水ヲ撒ケテ其全ク一塊トナルニ至ル而シテ
後水化石灰半量ヲ取テ之ヲ混合シ適宜ノ水ヲ

石鹼上
十五

灌ギテ之ヲ捏製ス此際ニ一個ノ桶ヲ側ニ將チ
來ル此桶ハ上下同徑ニソ底ヲ距ル一ニ二寸ニ
ノ一孔ヲ穿テ底ノ上ニハ稿牀ヲ安ク而シ稿牀
ト底トノ中間ニ注管ヲ插ム是レ此處ニ集ルノ
液ヲ洩出センカ爲メナリ灰ヲ稿牀ノ上ニ盛リ
搗キ固ムルノ後水ヲ桶内ニ充填シ靜定スル
若干時管栓ヲ去テ液ヲ洩シ滷汁薄弱ニ至レハ
即チ止ム之ヲ煮テ水分ヲ減セシメ卵ヲ投シテ
浮フニ至レハ輒チ石鹼匠ノ用ニ供スルニ足ル
多量ノ石鹼ヲ煮ルカ爲メ鍋ハ鐵或ハ銅ヲ底ト

ナシ木ヲ以テ縁トス其深サ大約五尺上經八尺
ヨリ九尺ニ至ル但其底ハ圓臺形ヲ宜トス石鹼
ヲ煮ルノ法ハ先ツ鍋内ニ純潔ナル獸脂ノ切片
ヲ投シ滷汁ノ一分ヲ注キテ大約鍋ノ四分一ニ
滿ルヲ度トス之ヲ煮テ其沸騰スルニ至レハ斷
ニス攪和シテ其水分ノ減スルニ隨テ新ニ滷汁
ヲ注加シテ之ヲ補ヒ此ノ如クシテ石鹼性ヲ生
スルニ至ル是ニ於テ尙ホ之ヲ煮テ稠厚ナラシ
メ而シテ後海鹽ヲ鍋中ニ投ス其量ハ脂一介餘每
ニ鹽一握ヲ用フヘシ是レ加里ノミヲ用ヒテ製

石鹼上

スルハ嘗テ獲可ラサル所ノ石鹼ノ硬固ヲ得
 セシメンガ爲ナリ即チ海鹽中ノ曹冑母自ラ分
 離シテ脂ニ和シ初ニ混合セシ加里ハ其成分
 ナル加餉母ト海鹽ヨリ游離スル所ノ格錄爾ト
 和スルナリ愈之ヲ煮熬シテ其液ヲ杓頭ニテ抄
 ヒ試ルニ流下ノ狀恰モ熟粥ノ如キニ至レハ之
 ヲ羅紗ニ裏ミテ冷桶中ニ懸垂シ中和鹽格錄兒
 加留母即チ所謂解凝鹽ヨリ生ズル不潔ノ滷汁
 ヲシテ石鹼ト剖解セシム是ニ於テ石鹼ノ質全
 ク佳好ナリヤ滷鹽或ハ偏勝セリヤ又ハ飽和セ

ザル剩餘ノ脂油之ニ交ルヲナキヤ否ヲ検査シ
 若シ平均ヲ得ザルノ徴ヲ見ハ其足ラサル者ヲ
 加ヘテ再ヒ之ヲ煮テ飽和ヲ得セシメ直チニ復
 タ之ヲ絨ニ裏ミ冷桶中ニ安キテ殘餘ノ滷液ヲ
 除却ス終ニ木型ノ底ニ布片ヲ敷キ其裏ニ注入
 シテ之ヲ乾固セシム但其型ノ縁ハ每個取離ス
 可ク造成ス而シテ石鹼既ニ全ク乾クノ後ハ型縁
 ノ木ヲ剖解シ絲ヲ以テ截斷シテ好ム所ノ大サ
 トナシ貯フ
 布帛ヲ浣洗スルカ爲ニ用ル軟石鹼ハ之ヲ製ス

開物叢說 家什第一 石鹼上 十七 開拓便

開... 家... 石... 油... 脂... 合...
開... 家... 石... 油... 脂... 合...
開... 家... 石... 油... 脂... 合...

ルニ海鹽ヲ加フルコトナク唯加里ト油脂ヲ合シ
テ之ヲ熟煮シ桶ノ類ニ移シテ貯藏スベキ適宜
ノ稠厚ヲ得ルニ至テ止ム
石鹼中ニ鹵鹽ト抱合セサル剩餘ノ油脂ヲ含ム
者ハ之ヲ水、或ハ亞爾個兒ニ溶シ試ルニ其油自
ラ分レテ露滴ノ狀ヲ見ハス佳好熟成ノ品ハ水
ニモ亞爾個兒ニモ悉ク溶解セスンハアル可ラ
ス若シ之ニ反シテ鹵鹽ノ偏勝スル者ハ其味ノ
苛烈ナルヲ以テモ察スヘク且他ノ藥液ニ和シ
テ較著ナル鹵鹽ノ常候(植物ノ青汁ヲ綠變シ姜

黄ノ黄色ヲ老虎色トスル等)ヲ發スルカ故ニ自
ラ分明ナリ
諸種ノ脂油ヲ以テ石鹼ヲ試製シテ其性質
ノ佳否ヲ檢査シタル考案
第一阿利襪油ヲ曹達鹵ニ和スル者
諸般ノ油類ヲ以テ石鹼ヲ試製センカ爲ニ曹達
鹵ヲ製スルノ法、左ノ如シ其法每次曹達二斤半、
生石灰百三十四箋ヲ合シ水ヲ注キテ鹵液ヲ淋
ス
(原註)石灰ノ量ハ製造ノ全量夥多ナルキハ宜

石鹼上 十八

開物叢書 卷之十一 家什第一 十六 開拓使

ク之ヲ減スヘシ(按ニ曹達五百斤ヲ用ルキハ
石灰ノ量僅百斤ヲ以テ足レリトス)若夫少許
ノ滷液ヲ試製セント欲セハ更ニ之ヲ増加シ
テ以テ苛性ヲ興スノ機ヲ全クスルヲ要ス
收ムル所ノ滷汁分テ三等トス頭滷最強ク二滷
稍稀ク三滷ハ最薄弱ナリ滷ヲ製シ得ルノ後直
チニ二斤半ノ阿利襪油ヲ銅鍋ニ盛り稀滷五度
ナル者大約四合許ヲ注キ木杓ヲ以テ攪和シ且
煮ルノ間斷エス稀滷ヲ加ヘテ熬ヲ補ヒ此ノ如
クニシテ煮ルヲ四時三滷方ニ盡レハ二滷ヲ用

フ復タ二時ニシテ盡ク即チ頭滷ニ移ル頭滷ハ
最苛烈ニシテ醇厚ナルヲ十二度但是ヲ注加シテ
盡スヲ無ク其過半ヲ留ム更ニ煮ルヲ一時石鹼
ノ質漸ク稠厚トナリテ自ラ水分ト相離レント
スルニ至テ食鹽十六箋ヲ此合劑中ニ投シテ其
分解ヲ催進シ尋テ火ヲ撤シ糊狀ノ石鹼全ク凝
固ノ性ヲ得レハ輒チ之ヲ抄泡杓ニテ抄ヒ上ケ
テ鍋中ノ剩滷ヲ傾ケ去リ復タ鍋ヲ火ニ上セ少
許ノ水ヲ石鹼ニ加ヘテ溶解ヲ促シ且殘ル所ノ
強滷ヲ加ヘ復タ之ヲ煮ルヲ一回再ヒ抄泡杓ヲ

開物叢書 卷之十一 家什第一 石鹼上 十九 開拓使

以テ石鹼ヲ抄ヒ更ニ鍋底ニ生スル些少ノ剩凝
ヲ除キ終ニ石鹼ヲ鍋ニ入レ大約油量ノ三分一
ノ水ヲ注和ス是レ其全ク溶化セシテ望ムカ
爲ニシテ且之ヲ型ニ鑄ルニ適スルナリ次日ニ
至リ秤テ五斤半ノ石鹼ヲ得此品頗堅硬ナリ液
雖モ尙夥ク水ヲ含ムカ故ニ直チニ貯蓄ス可ラ
ス否レハ二斤半ノ油ハ能ク四斤二十五箋ノ石
鹼ヲ生スヘキノミ此秤量甚重キハ皆含ム所ノ
水分ニ係ル是レ自ラ速ニ蒸散ヌベシ則チ之ヲ
大氣ニ晒ス一ニ筒月ナレハ石鹼ノ重量著ルク

減シテ大約四斤ナルヲ以テ證トスベシ此品既
ニ乾固スルニ至レハ佳香恰モ馬塞里所産ノ石
鹼ト異ナルヲナシ

第二扁桃油(是レ醫家賞用スル所ノ内服
石鹼ノ製ナリ

甘扁桃ノ榨油ハ石鹼ヲ製スルニ良ナルヲ阿利
襪油ニ讓ラズ通常鹼匠多ク之ヲ取用スルカ故
ニ利譽最高シ然レ此品唯醫藥ノ用ニ供スル
ノミ藥局ニテハ之ヲ製スルニ火ヲ用フルヲナ
シ其法扁桃油二分ニ鹵液一分ヲ用フ此二味ヲ

開物錄 卷之十 石鹼 二十一

開物叢書 家什第一 研和シテ其自ラ凝聚シ内服ノ用ニ充ツヘキ性

ヲ得ルニ至ル其乾固スルマデハ幾許ノ時日ヲ
費ス若シ之ニ反シテ阿利襪油ヲ用ルガ如ク煮
製スルキハ一日ニノ卒業ス但シ醫藥ノ用ニ供ス
ル者ハ銅器ヲ禁スヘシ

第四猪脂

又諸邦ニ於テ猪脂ヲ以テ石鹼ヲ煮ルノ料トシ
或ハ之ヲ牛脂ニ交ヘテ二脂合成ノ石鹼ヲ造ル
者アリ
二斤半ノ猪脂ヲ以テ煮ルノ前法ノ如クニシテ

型ニ注入シ冷定ノ後大約七斤ヲ得此品美白ニ
シテ不佳ノ臭ナシ風乾三箇月減耗シテ四斤ト
ナリ著ルキ堅硬ノ質ヲ得然レモ猪脂ハ其價廉
ナラスシテ日用飲饌欠可ラサル所ノ品タリ故
ニ石鹼ヲ製スルニハ其經久ナル者或ハ他ノ獸
脂ヲ用ルヲ便トス
獸脂ヲ以テ石鹼ヲ煮レハ諸脂共ニ鍋底ニ幾多
ノ傑列乙質ヲ生ス是レ脂ノ本質ヨリ分レ出ル
者ニシテ滷鹽ト親和スルノ能ハサルノ性ヲ具
フルガ故ニ自ラ分レテ傑列乙様ノ形ヲ現スナ

開物叢書 家什第一 石鹼上 二十一 開拓使

リ(傑列乙、粘稠ノ液)

第五陳舊ノ酪

酪ト曹達ヲ合煖スルモ亦好石鹼ヲ生ス然レモ
是亦飲饑ノ用ニ供シ且其價モ貴キカ故ニ是ヲ
用ルヲ稀ナリト雖モ其陳敗シテ復タ食ス可ラ
サル者以テ石鹼ノ料ニ充ル益無シトセス
陳敗シテ鹽味ヲ帶タル酪ヲ以テ試ニ石鹼ヲ製
セント欲セハ宜ク先ツ細カキ截片トナシ水煮
シテ其舍ム所ノ鹽分ヲ溶出スヘシ而シテ後其水
氣ヲ去リ此酪二斤半ヲ苛性曹達適ニ和シテ煖

ルヲ前條ノ如シ頗ル容易ニ石鹼ヲ得ベシ此品
亦過量ノ水ヲ含ムト雖モ變シテ柔軟トナル
無シ而シテ二斤半ノ酪ニテ製シタル石鹼初テ型
ヲ出ルル其量九斤二十三箋アリ其色潔白ナリ
ト雖モ稍陳敗ノ臭ヲ帶ルヲ免レヌ風乾二月
ヲ經レハ輒チ減シテ五斤百二十箋トナル(臭モ
亦漸消ス)爾後之ヲ乾燥ノ地位ニ貯レハ更ニ輕
虚トナル此品亦日用ニ佳ナルト牛、猪ノ脂ヲ以
テ製スル者ニ劣ラス

第六馬脂

石鹼上

二十二

石鹼上

馬脂ハ常ニ流動スルコト油ノ稠厚ナル者ノ如シ
以テ燈トシ或ハ薪ニ代フ此油ヲ以テ前法ノ如
ク煮テ五斤三十箋ノ乾白石鹼トナル大氣ニ晒
シテ二月ヲ閱レハ則チ四斤二十五箋トナリ硬
固純白惡臭無ク使用ニ便ナリ

第七 薑油

薑油ハ通常硬石鹼ノ用ニ供セスシテ唯軟石
鹼ノ原料トシ大ニ利益有ル者トス然レモ久ク
實驗ヲ經テ方ニ知ル此油モ亦硬石鹼ヲ製スル
ニ堪エテ植物諸油ノ中阿利襪扁桃ノ兩品ニ亞

テ佳ナル者タルコト薑油二斤半ニ曹達涵ヲ
加ヘ煮ルコト阿利襪油ノ法ノ如クニシテ型中ニ
四斤二十五箋ノ石鹼ヲ得其色淡白稍黄ヲ帶ブ
頗ル硬固ナレモ第一品ノ如クナラズ是レ含ム
所ノ水量稱比同シカラサルノ致ス所ナリ之ヲ
氣中ニ晒スコト二個月乾テ量ヲ減スルコト一〇
六箋ニノ殘ル所三斤十六箋アリ是レ於テ此品
全ク乾燥ス然レモ畢竟阿利襪油ヲ以テ製スル
カ如キ枯乾ノ宜ヲ得ルコト能ハス若シ此患無ク
ンハ此油亦甚稱譽セラレン

石鹼上 二十三

開物叢書 家什錄 一

第八 蕪菁油

蕪菁油モ其徵候性狀略、蕪菁ニ均シ而シ多ク軟
石鹼ノ用トス純潔ノ蕪菁油二斤半ニ曹達瀉ヲ
加ヘテ煮ル上法ノ如クスレハ石鹼四斤百二
十箋トナル風乾三個月ノ後之ヲ秤レハ三斤百
十八箋ニ減ス暗白帶黃頗ル乾固ス然レモ竟ニ
阿利穢油ニ及フヘカラス

第九 罌粟油

罌粟油ハ硬石鹼ヲ造ルニ適當ナラス唯軟石鹼
ヲ製スルニ最良ナルノミ此油無味ニシテ不佳

ノ氣ヲ帶フテ無ク以テ飲饌ノ品ニ充ツヘシ故
ニ佛蘭西國ニテハ常ニ之ヲ碎賣ス此他尙之ヲ
燈火ノ用ニ供ス此油二斤半ヲ以テ石鹼ヲ煮ル
ニ型ヲ發スル中秤量四斤七十箋其色白ケレモ
潔白ナラスシテ異黃水ニ和スルテ稍易カラズ
二個月ノ後秤ルニ僅ニ三十箋餘ヲ減スルノミ
而シテ貯フルノ室甚枯燥スルニ非レハ石鹼
ノ上面漸ク軟鹼ニ變ス故ニ此油ハ獨用シテ硬
鹼ヲ造ル可ラス之ニ和スルニ阿利穢油或ハ凝
固セル獸脂ヲ以テスレハ則チ亦硬固ノ品ヲ得

開物叢書 家什錄 一 石鹼上 二十四

ヘシ

第十大麻油

大麻仁ノ油ハ軟鹼ヲ製スルノ絶品ナレモ硬鹼
 ニ於テハ全ク用ナシ試ニ此油二斤半ヲ以テ常
 ノ如ク煮製セシニ得ル所ノ品硬固ナラスシテ
 其重四斤二十五箋アリ若シ稍水液ニ觸ルハ
 アレハ忽チ化シテ軟柔トナル之ヲ乾燥ノ地ニ
 放在スルト二箇月其量六十四箋ヲ減シ初ニ比
 スレハ稍硬固ナリト雖モ竟ニ石鹼球ヲ製ス可
 ラス其久ク大氣ニ觸ル者ハ氣ノ交代ニ因テ

褐色漸ク消シテ白色トナル然レモ此色復タ初
 ニ復リ易シ
 按ニ石鹼球ハ石鹼ヲ一二寸或ハ三四寸ノ長方

形、橢圓形ニ製シタル者ニシテ皆其大塊ヲ
 細分シ欵識小照ヲ施シテ發販スル者ニシテ
 下卷所謂卓袱石鹼亦石鹼球ノ佳麗ナル者ナ
 リ裴斯氏ペイスの府ニ石鹼球ノ方ヲ載ス是レ古方
 ト雖モ亦參耒ノ爲ニ此ニ附譯ス
 石鹼球ヲ製スルノ良法ハ白色好石鹼五斤ヲ
 細ニ割ミ之ニ半斤ノ水ヲ注キテ之ヲ溶ス但

博物叢書 卷之十 石鹼上 二十五 附新地

シ此水ハ豫メ六個ノ緑橙ヲ投シテ煮、濾過シ
 且橙ヲ強ク榨ル可シ(按ニ橙實ノ酸汁ニ用無シ)
 シ蓋シ橙皮ノ芳香ヲ與フル(ミ)而シテ石鹼既
 ニ此水ニ溶ケ了レハ即チ火ヲ撤シ乾固細研
 漿粉二斤半ト橙皮精(橙皮ヲ火酒ニテ蒸餾スル者)適宜ヲ注加シ之ヲ適意ノ形トナス
 第十一 胡桃油
 胡桃油ノ佳ナル者ハ飲饌ニ供スヘク且畫家入
 愛重ヲ蒙ル故ニ其價貴クシテ石鹼匠ニ使用セ
 ラルトナリ然レモ是ヲ以テ前條ノ諸法ノ如

ク滷汁ト合煮スルニ二斤半ノ油能ク三斤四十
 八筭ノ石鹼ヲ生ス此品性質中等ナレモ白色淡
 黄粘稠ニテ糊ノ如ク氣ニ觸レテ褐色ニ變シ且
 乾固シ難ク動モスレハ氣内ノ水濕ヲ引テ益軟
 ナラントス乾燥ノ處ニ置クト二個月ナルモ秤
 量三斤百十六筭ヨリ減セヌ若シ少ク濕ク含メ
 ハ輒チ柔軟粘膩トナル故ニ此品以テ石鹼球ノ
 用ニ充ツヘカラス

第十二 亞麻油

亞麻油モ亦硬石鹼ヲ製ス可ラス只軟石鹼ノ用

ニ充ツヘキノミ此油通常多ク畫料ニ用ヒ殊ニ
多ク假漆ノ主劑トス亞麻油二斤半ヲ以テ常ノ
如ク曹達ニ和シ四斤二十五箋ノ石鹼ヲ得初ハ
白色ナレハ速ニ黄色ヲ生ス其質粘稠膠着シ中
等ノ性タリ氣ニ晒シテ乾固シ難ク烈キ臭ヲ帶
ヒ且少ク水濕ヲ受レハ甚柔軟トナル乾燥ノ處
ニ放置スルヲ二個月ニノ量ヲ減スルヲ六十四
箋然レハ粘膩依然トシテ初ノ如シ
此二件ノ試ニ因テ乾固シ易キ稟性ノ油ハ却テ
石鹼ノ料トスルニ不可ナルヲ疑フ容ルヘカラ

サルナリ

鯨油及他ノ魚油ヲ以テモ亦嘗テ之ヲ試ミタリ
ト雖共ニ好キ硬石鹼ヲ得ルヲ能ハス
西班牙曹達ハ毎ニ之ヲ獲ルヲ難ク殊ニ戰爭ノ
日ニ在テハ最賤ヒ得難キカ故ニ海鹽ヲ分解シ
テ曹達ヲ取リ是ヲ以テ前件諸法ノ如ク諸種ノ
脂油ニ合シテ石鹼ヲ製シ各種ノ品ヲ得ルニ性
効異ナルヲナシ

第十三 罌粟油ト牛脂ノ合劑

前件諸試ノ内獨用シテハ硬固ノ石鹼ヲ得ベカ

動物糞油 第十篇 石鹼上 二十七 開船便

開物雜記 卷十 第十篇 石鹼上 二十八 開略 鹿

ラサルノ油ト雖モ是ニ獸脂ヲ和スレハ則チ能ク其任ニ堪ユ即チ次ノ試験ノ如シ
罌粟油牛脂各一斤四十箋ヲ詳和シ常法ノ如ク苛性曹達ヲ注キテ煮レハ竟ニ型中ニ五斤ノ石鹼ヲ得是ヲ乾燥ノ處ニ放置スル一ヶ月其量一斤六箋ヲ減シテ著ルク硬固トナリ以テ石鹼球ノ用ニ充ツルニ堪エタリ
蕪菁薑薑ノ油モ亦此ノ如ク同量ノ阿利襪油或ハ獸脂ヲ和スレハ則チ甚硬キ品ヲ得ル一上ノ如シ然レモ獸脂ヲ用ル所ノ石鹼ハ多少其臭氣

ヲ帶バサル一能ハス但是ニ少シノ刺賢埴兒油(刺賢埴兒ハ芳草ノ名和産ナシ按スルニ迷迭香油或橙皮油丁香油代用スヘシ)ヲ加フレハ即チ佳香ヲ生ス而シテ價ヲ増ス一亦甚微ナリ
第十四加里ト脂油ヲ用ルノ試験
加里ヲ以テ石鹼ヲ製スル一ヲ試シガ爲ニ通常石鹼ノ料トシテ最良ナル油ヲ撰ヒ且其油二斤半ヲ用テ前法ノ如ク之ヲ煮熬セリ
至佳ノ阿利襪油二斤半ニ強弱三等ノ加里適ヲ漸ク加ヘテ煮ル一全ク曹達適ニ於ケルガ如ク

開物雜記 卷十 第十篇 石鹼上 二十八 開略 鹿

家什録

シテ鍋中ニ佳好ノ石鹼塊ヲ生ス殆ト望ム所ニ
協フガ如シ然ルニ型ニ鑄入スルノ後軟ニシテ
粘膩ナルト竟ニ依然タリ此回用ル所ノ加里欲
スル所ノ度ニ中リテ合成ノ石鹼其性ハ即チ美
ナリト雖モ憾ラクハ硬固ナルト能ハスシテ糊
狀稠ノ形ヲ存シ其稠厚ナルヤ恰モ猪脂ニ髣髴
トシ其量五斤アリ
又同法ニ據テ牛脂二斤半ヲ加里滷ニ合メ煮タ
リシニ亦大斤百〇四箋ノ軟石鹼ヲ得タリ只是
レ水ニ溶シテ洗滌ノ用ニ供スルハ即チ可ナリ

ト雖モ竟ニ貯藏スヘカラス是ニ於テ再ヒ望フ
失ヘリ方ニ悟ル加里ハ竟ニ硬固ノ石鹼ヲ得ヘ
カラス若シ此ニ副加スルノ物件アリテ能ク其
性ヲ變移スルトアラハ即チ可ナラン
第十五加里ヲ以テ硬石鹼ヲ製スルカ爲
ニ副加スヘキ物件ヲ論ス
爾後諸家ノ試ニ因テ海鹽即チ此良効ヲ逞クス
ベキヲ發明セリ此物能ク加里ノ力ノ及バサル
所ヲ助ケテ硬鹼トナラシム之ヲ用ルノ法亦前
式ノ如ク阿利襪油二斤半ニ適宜ノ量ナル加里

博物彙編 家什録 不器上 二十九 開拓使

開物叢書 家什第 一 石鹼上 三十 開物叢書

滴ヲ加ヘテ煮ル此問別ニ五斤ノ食鹽ヲ適宜ノ
水ニ溶解シ此鹽水一分ヲ軟鹼ノ鍋内ニ注加シ
テ合煮シ水分蒸散スルニ隨テ漸ク之ヲ増益シ
此ノ如クニメ煮ル二時鍋下ノ火ヲ撤スレハ
石鹼既ニ全ク硬固ノ質トナリ鍋底ニ多量ノ鹽
塊ヲ生ス是レ水分ノ耗散ニ因テ復タ溶解流動
スルヲ能ハス漸ク凝聚スル者ナリ之ヲ除却シ
テ後適宜ノ水ヲ加ベテ石鹼ヲ溶シ型ニ鑄入ス
此ニ於テ甚硬固トナリ其色亦潔白佳香ヲ帶ヒ
秤量六斤百〇四箋アリ之ヲ乾處ニ置ク二個

月減シテ四斤二十五箋トナル而ノ初ヨリ曹達
ヲ用ヒタル者ト性効貳ナシ
加餉母(加里ノ元)ノ格録爾ニ親和スル力ハ曹
母(曹達ノ元)ヨリ強シ故ニ海鹽ニ加里ヲ和スレ
ハ加里中ノ加餉母海鹽中ノ格録爾ニ親和シテ
格録爾加餉母トナリ曹達母ハ遊離シ又再ヒ酸
化シテ曹達トナル是故ニ加里石鹼ヲ製スルニ
方テ之ニ海鹽ヲ投スレハ曹達自ラ分離シテ油
ニ和スルナリ若夫曹達石鹼ヲ製スルハ之ニ
海鹽ヲ加フト雖モ敢テ化學作用ヲ發スノ無ク

開物叢書 家十第 一 石鹼上 三十 開物叢書

開物叢書 卷之十一 石鹼 三十一 開石使

唯剩餘ノ水分ヲ吸收シテ石鹼ノ凝結ヲ促スノ
ミ然レモ曹達石鹼ノ製法ニ於テ海鹽ヲ加フル
ハ殆ト無益ナリ
又試ニ加里ト阿利磯油トヲ以テ軟鹼ヲ製シ而
後硫酸曹達(芒消)ノ溶液ヲ以テ之ヲ煮ルニ此鹽
ノ能力亦海鹽ニ均シクシテ硬固ノ好石鹼ヲ得
タリ蓋シ其理亦一般ナリ加里ノ硫酸ニ於ケル
親和力ノ強キト曹達ニ勝レルカ故ノミ
後回幾多ノ試験ニ原キテ鹼匠更ニ簡捷ノ一方
ヲ考得タリ其費モ亦寡シ即チ初メハ加里鹼ヲ

用テ二斤半ノ牛脂ニ和シテ煮其終ニ至テ曹達
鹼ヲ以テ業ヲ竣ル此ノ如クニ得ル所ノ品單
曹達ノミヲ用ヒタル者ト異ナルヲナシ此品型
ヲ出ルキ六斤十九箋アリ二旬ヲ經ルノ後一斤
二十一箋ヲ減ス

第十六火ヲ用ヒズシテ石鹼ヲ製スルノ
試考

一鹼匠以爲ク石鹼ヲ煮ル所ノ薪ヲ省キ唯氣濕
ノ力ノミヲ假ルモ亦曹達ト油トヲ親和セシム
ベシト即チ其法ヲ試ルヲ左ノ如シ

開物叢書 卷之十一 石鹼 三十一 開石使

之ヲ製スルニハ豫メ恰好ノ器ヲ擇ブ通常酪ヲ
 貯ルノ桶或ハ酪餅ノ大ナル者ヲ以テス器底ニ
 一片ノ木ヲ固附シ中心ニ鉄ノ小筒ヲ挿ム筒孔
 ニ木ノ圓棍ヲ具フ其動轉自在ナルベシ別ニ小
 攪棍アリ横ニ此圓棍ヲ貫キテ直角ヲナス其長
 サハ桶經ニ及ハサルヲ半寸桶内ニ在テ攪轉障
 ル所無シ而シテ桶上ニ十字形ノ鉄杷ヲ設ク杷ノ
 中心亦桶底ニ在ルカ如キ鉄筒ヲ具ヘテ直立圓
 棍ノ頭ニ冒ル最上ノ筒子其上ニ旋螺アリテ以
 テ棍ト相離ルヽヲナシ而後蕩棍ヲ之ニ附着ス

蕩棍ノ線ハ攪棍ノ上部ニ具フル所ノ絡子ヲ絡
 ヘリ以テ其前後ニ向テ蕩搖攘轉セシメ桶中藥
 液ノ運動止ムヲ能ハサラシム
 此器ノ裝置既ニ全キニ至テ輒テ前法ノ如ク曹
 達滴ヲ製ス而シテ桶中ニ若干量ノ油ヲ注ク譬ヘ
 バ阿利襪油六斤ナレハ先ツ八斤ノ滴三斤ヲ和
 シ之ヲ蕩搖攪拌スルヲ少クモ四分一時次ニ十
 八度ノ酸滴三斤ヲ加ヘ之ヲ搖盪スルヲ一時ノ
 後更ニ同等ノ強滴三斤ヲ和シ斷エズ運動セシ
 メテ油ト滴ト漸ク熟和シ凝テ稠厚糊狀ヲ得ル

用物叢覽 一家十第 一 石鹼上 三十二 一 開石匣

ニ至ル之ヲ桶中ニ放ク一二三時ノ後木杵ヲ以テ搥テヲ扁平ノ槽ニ移シ放置ス槽ハ即チ型ナリ此ニ因テ恰好ノ形状ヲ得數日ノ後石鹼漸ク乾キ手ヲ以テ把持スベキニ至ル即チ之ヲ木版上ニ風乾ス二個月ニシテ全ク乾固ス若シ夫蕪菁油等ヲ用ル者ハ宜ク二十度ノ滷ヲ以テ前法ノ如ク之ヲ製スベシ晒乾ノ時月ハ必ス二個月ヲ經ンコトヲ要ヌ是ニ至テ全ク凝固シテ良性ノ石鹼トナル然レモ阿利襪油ノ者ニ比スレハ竟ニ其量減耗シ難クシテ絶品トセス

或ハ又火ヲ用ヒズシテ石鹼ヲ製スルニ油二分ト糞テ水分ヲ蒸散シタル稠厚ノ曹達滷一分ヲ用フ然レモ此レ全ク益無キノミ何トナレハ滷汁ヲ糞テ稠厚ナラシムルノ間既ニ幾分ノ薪ヲ費スガ故ナリ且冷製ノ石鹼幾件ノ不可アリ之ヲ歴指スレバ
第一 冷製ハ糞製ニ比スレハ曹達滷ヲ費ヤスコト多シ
第二 此製法唯醇厚ノ滷ノミヲ用ヒテ曹達ヲ淋スルニ方テ得ル所ノ稀滷悉ク用ニ充

開物叢說
家什第
開物叢說

タラス

第三 其品多クハ粒状ヲナス

第四 乾固ノ時日ヲ費ス毎ニ煑製ノ者ヨ

リ久シ

此諸件アルガ爲ニ冷製ノ法廢棄ヒラレテ煑製

ノ法ノミ普ク行ハル

石鹼譯說卷上終

